

大学で研究すること

人間福祉学部長 室田保夫

日本の社会事業史研究の開拓者であった吉田久一は社会福祉学における歴史研究の重要性を指摘しただけでなく、その中でも先の戦争への反省から「福祉と平和」の課題を終生追い求めた研究者であった。吉田にとってそれは戦争犠牲者に対する「鎮魂」の謂であった。そこには明確なモチーフがあり、まさに「自分のなかに歴史をよむ」（阿部謹也）という問題意識を内包していた。

「福祉と平和」の関係については、小生も『キリスト教社会福祉思想史の研究』（1994）の中で内村鑑三、桂木頼千代、高橋元一郎、柏木義円らを取り上げ、この問題を論じたことがある。その中で有名な内村の日露戦争に対する非戦論は「戦争廃止を目的とする平和主義に優さりて善且つ大なる慈善事業を思附くことは出来ません……略……戦争廃止を一年早くすることは、孤児万人を救ふに優さる慈善事業であると思ひます」（『内村鑑三全集』13巻284頁）というものであった。安中教会牧師柏木義円も「平和主義は最大の慈善事業なり」（『上毛教界月報』84号）と唱導した。戦争云々はもちろんであるが、我々がここで注目していく必要があるのは、その視点の置き方であろう。

戦争によって生じる孤児や寡婦、家庭崩壊、障害者問題、精神の荒廃等々を救済するのは、もちろん社会福祉（社会事業）の一環である。しかし彼らの基本的な視点の置き方を我々は忘却していないだろうか。現代、社会福祉学界では原論不在であるとよく言われる。原論は学問体系を構築する核であり、多様な領域の架橋となるものである。寄って立つ土台がない学問は悲劇である。まして社会問題や生活問題が複雑化している現代であるならば、尚更であろう。例えば貧困問題はあらゆる現象の本質的な問題提起でもある。しかし貧困問題を現象として捉え、それへの対処を考えていくだけでいいのか、戦争で傷ついた人々への支援はその根源への照射がない限り、永久に課題として残されていく。こうした過去の人々の言説を、そして思想を想起することは我々の研究に必要である。過去に生きた人々の「叡智」には、宝が埋れている。

我々が研究者として責任を果たしていくことは、物の本質を見極めていくことにある。現象を本質と理解し、本質と現象が逆転し、本質を見逃してしまう危険性もある。「福祉とは何か」、「人間とは何か」「価値とは」「人権とは」「生存権とは」、不断に問いを發しながらその本質を追求していくことが大切である。それには歴史的視点を避けることが出来ない。吉田久一や一番ヶ瀬康子らが歴史に拘ったのも至極当然である。

哲学や歴史、思想といった研究は人々が物事を考えて行くときの必須のものである。それは効率から考えれば一見、無駄、かつ無益なものであるかもしれない。しかし所詮学問とは暇（時間）と余裕（自由）の中に存在するものではなかったか。「平和」や「環境」を考えながら「福祉」の本質をみていくことは決して無駄ではない。そうした一見暇な、余裕の時間が欲しいものである。本来なら大学とはそういうところであったのではなかったか。そして教育の効果とは目先ではなく、何十年後に現れるものでもある。我々の世代からすれば、今の大学は余りにも窮屈なものとして映り、こういった時代遅れの不平は単なるノスタルジャーなのかもしれない。「真理の探究」という言葉はもはや死語になったのだろうか等々、古い大学像、観念であると自戒しつつも、「されど大学」なのである。